震災美談

三人の學生は、自分達は朝鮮人の學生であること、地震のためにあてもなく迷ひ歩いて居ることを述べ、今夜は當家の門前の廣場で露宿したいから、何卒蓆を一枚貸して頂きたいと懇願した。主人の貝塚氏は玄關番の老人と鮮人青年との應對する聲を奥で聞いて居たが、何やら埒があかない樣子であつたので、自身玄關へ立ち現はれた。委細を聞いた氏は『それはお氣の毒だ、なに？露宿する？それはいけない、幸ひ私の宅は明き間もあるから、遠慮は要らない、はいつてお泊んなさい、その代り此の際の事で御構ひはできないが』貝塚氏の言葉には眞情が籠もつて居た。三人は地獄で佛に會つたやうに喜こんだ。かうして三人は貝塚氏の親切で、夜露にもうたゐることなく、食事にもありつき、何の不安もなく疲れた身を疊の上に横たへることができた。

明けて二日となると、例の鮮人來襲說が傳はつて、附近では自警團が組織され、嚴重な警戒の下に朝鮮人を物色することとなり、貝塚家に鮮人を泊らせて居ることが判ると、自警團の連中は度々やつて來ては引渡しを迫つたが、その度毎に貝塚氏は自分が引受けたから心配はないと言つて彼等を退け、三人を飽くまで保護した。五日になつて、金、高の二人は歸鮮することになり、主人に厚く禮を述べて去つたが、田君は引つづいて貝塚氏の世話になり、二十五日まで滯留した。貝塚氏が所用で鄕里三重縣へ行くことになり、田君も群山の自家へ歸りたい希望だつたので、その日に貝塚氏は田君と共に東京を發し、名古屋まで同車して別れた。出發の際貝塚氏は金二十五圓を旅費として田君に與へた。

八、朝鮮人に手を下すなら

先づ我輩から片付けよ……豪膽な鶴見署長

神奈川縣鶴見町では、九月一日大地震で町内と附近部落即ち鶴見警察署管内で四十三名の死者と百七十名の負傷者を出した。此方面は海邊だけに、大地震

には直ちに海嘯の心配があり、現に當日の午後四時頃から沿岸一帶の人々は地震よりも海嘯を氣遣ひ、潮田村方面の漁民達は口々に『海嘯が來る』と叫んで續々と鶴見町へ逃げて來た。その潮田在から難を避けて來た六千人ばかりの人達は、何れも總持寺の境内に集まつた。小高い岡を占めてゐる境内は、地震にもまた海嘯にも安全な避難場所であるから、鶴見附近の住民で一杯になつて居た。避難民の中には數百名の朝鮮人勞働者も混つて居た。一日の夜は不安の裡に明けた。ひどく心配された海嘯も、ただの噂ばかりで、何の事もなかつた。潮田方面の人々も安心して、多くは二日のうちに歸つて行つた。併し若干の朝鮮人達は餘震を恐れて、そのまゝ總持寺に殘つて居た。

二日の早朝、誰れ言ふとなく、横濱では地震を勿怪の幸に、不逞鮮人數千群をなして、家に火を放ち、貨財を掠奪し、人命に危害を加へ、婦女を凌辱し、井戸に毒を投ずるなど、あらゆる殘虐を恣にして居る、そして彼等は帝都を指して殺到すべく、程なく此處へやつて來るから氣を付けよとの警告が疾風のやうに耳から耳へ傳はり、鶴見附近の居住者は地震の怖さよりも朝鮮人に恐れをなし、老幼婦女子は山かげ木の間にかくれ、壯年男子は得物を携へて要所々々を警戒し、東海道はさながら戰場のやうな騷ぎになつてしまつた。その大混亂のまつただ中に、鶴見警察分署長大川常吉氏が沈着にして剛膽なる行爲により、民衆の妄動を制し朝鮮人を保護した事績は誠に壯烈なものである。

九月二日の正午頃であつた、燒きつけるやうな炎天に、汗みどろとなり、息せきつて横濱方面から避難して來た支那人と覺しき四人連が鶴見停車場に近い豊岡といふ所で井戸を見つけ、代る代る釣瓶に口をつけて渴を癒やして居た。彼等の中に怪しげな二本の壜を携へた者があつた。此の光景が折しも鵜の眼鷹の眼で警戒をして居た民衆の眼に入らない筈はない。怪しいぞ、的きり朝鮮人に相違ない、あの壜の中味は毒藥だ、それ引つ捕へろ、と民衆は狂氣の如

くその人達をおつとり卷き、有無を言はせず警察へ連れて行つた。署長はじめ署員一同が野天に陣取つて居る所へ引つ張つて來て『此奴等が豊岡の井戸へ毒を投げ込んだから調べて貰ひたい』と言ふので、大川署長は『宜しい』と答へて直ぐさま四人を取調べた。彼等は横濱在住の支那人で震火に追はれて逃れ出し、東京方面へ避難し行くところであつた。中には怪我をして居る者もあつた。『これは中華民國の人達だ、誤まつて外國人に危害を加へたら面倒だぞ』と、署長は早速負傷者に手當をさせ、民衆に對しては朝鮮人でない、そして携へた壜の中は毒藥でないことを告げたが、極度に昂奮せる民衆は更に署長の言葉を信じない、何と言つても毒を入れたに相違ないと立ち騒いで始末におへない。そこで署長は『よし、諸君がそれほど疑ふなら、我輩が此の壜の中味を飲んで見せやう、さうしたら毒藥か否かが判る譯だ』と、兩方の壜に入つて居る液體を並み居る群集の目前でグツと一息に飲んで見せた。素より署長には確信があつたので、之より先き署長は、二本の壜を調べて、一本の中味はビールで、他の一本のは支那醬油であることを確かめて居たから、群集の前で少しの躊躇もなくガブガブと飲んで見せることができたのであつた。高い所につゝ立つて、平氣の平左で、――ビールの方はうまかつたらうが、醬油はさすがに飲みづらかつたらう――ゴクリゴクリやつて居る署長の態度に、群集も疑念を霽らして、さては毒ではないのかと安心した。

時刻が移ると共に、朝鮮人に對する民衆の警戒は益々嚴重となつて、鮮人と睨んだ者は片つ端から警察へ引つ張つて來た。手負ひの者も尠なくなかつた。大川署長は、此の調子ではどんな間違ひが起るかも知れないと心配して、管下の住民を出來るだけ多數寄せ集め、自ら一場の訓諭を試みた。署長の聲は銅鑼のやうに響き、そして雄辯であつた。『諸君、今日只今の狀態は、なるほど交通通信の機關も杜絶して、我が鶴見方面も孤立の有樣であるから、流言浮説の眞

否を判斷することはできないが、恐らく私は此の流言は大袈裟なものだらうと思ふ、素より餘震も頻々と來る際でもあり、惡い者も居ないとは限らぬから、旁々警戒は必要である、諸君に於て嚴重に警戒されることに異存はない、併しながら早まつてはいけない、警察權を無視して妄動することは許されないのである、治安については警察が其の責に任ずることを忘れないやうに希望する』……

……署長の熱心な演說に、群集の中から拍手する者もあつた。が大聲俚耳に入らず折角の訓諭も熱狂せる多數民衆の間に徹底しなかつたと見へ、やゝもすると不穩な行爲が演ぜられ、民衆の手に捕へられて警察署に連行される鮮人が陸續と踵を接し署内に收容できないほど多數に上つた。大川署長が、是等の鮮人は何れも良民だ、危險な人物は居ない、よし不逞漢が居たにせよ、警察に收容する以上何事を爲し得やうぞ、諸君安心して宜しいと、百方說得に努めたけれども、群集はなかなか承知しない、何とか始末して仕舞へと迫つて己まなかつた。警察署の構内には收容しきれぬところから、總持寺境内に移して、警察が全責任を以て監視することにした。

三日に至つて地方住民の朝鮮人に對する反感は益々高まつた。此儘に打ち棄て置ては由々しき大事に至ることを署長は心痛した。一方土地の有力者達からは、此際一刻も早く總持寺に保護中の鮮人を放逐して貰ひたい、若し彼等が一團となつて、兇行を働らく時は、土地の不幸此上もないから、一人も殘さず此鶴見から追ひ拂つて貰ひたいとの强硬な要求もあつた。併し署長としては、何としても其の要求を容れることはできない、何故なれば朝鮮人横行の噂は次第に高く、民心は極度に激昂せる際だから、若し收容中の彼等を手放したが最後、彼等の身の上はどうなるか判らない、中には妻子を擁する者もある、混亂の場合一律に鮮人は不逞者と見られて、民衆のため迫害されんとするを、人道の上より座視するに忍びない、此の場合たとひ自分の一身を犧牲としても、他くま

で彼等を保護するは、己れの職責であり、また人道に忠なる所以であると、大川署長は玆に決死の覺悟をしたのである。此時人心の激憤其の頂點に達し、署員の出やう次第では警察署を燒打ちでもしかねまじい形勢であつた。沈着にして剛毅なる署長は、有志の前で下手に鮮人追放の要求を拒むは危險を加ふるばかりと思つたので、一策を案じ『宜しい、諸君がそれほど要求するなら鮮人は立派に放逐しやう、併し普通の所に手放してはよくないから、遠方へ送り出すことにしやう』と答へて、人々の感情を一時和らげ置き、巡査部長一名巡査七名を押送部隊として兎に角總持寺から警察署まで連れ來り、その上で適當に放逐の手段を講ずるから、青年團や自警團に於ては、その途中一人も事故のないやうに援護して呉れるやうにと懇請した。有志一同も之を諒とし群集にもその旨を傳へたので、總持寺から署までの間は何事もなく鮮人を護送することができた。扨て署まで連れて來はしたものの、送り狼のやうに跟いて來た民衆、殊に土地の有力者連は、署の構内に居すわり、怖ろしい權幕で、早く追放せよ、片時も早く放逐せよと嚴談甚だ急である。『我輩が引受けた以上我輩に任せるが宜い、理不盡な話はよせ』と署長は刎ねつけた。玆に於て署長と有志との間に激論が始まつた。署長は人道主義から說いた『罪なき者を苛なむは蠻行である、我が大和民族の特性は敵人と雖も之を憫れむ所に存する、況んや朝鮮人は日本の國民である　陛下の赤子である、根據なき流言浮說に迷はされて、非道の事があつては、お互の恥辱だ』と口を酸くして說得した。然るに土地が横濱に近く、横濱が全滅するほどの大火災は主として鮮人の爲した業だといふ流說を信じ切つて、灼熱の體に憤怒して居る民衆は、署長の警告には少しも耳を籍さなかつた。千人もそれ以上もの群集は、警察署を包圍して、今にも暴行を働かんとする氣勢を示した。萬事休す矣。今は鮮人の保護どころか、署も署員も危機に瀕した。最早議論の餘地はない。署長は早やこれまでと決心した『よし、

君等が我輩の言ふ條理を解し得ないなら、今は是非もない、鮮人に手を下すなら下して見よ、憚りながら大川常吉が引き受ける、此の大川から先きに片付けた上にしろ、われわれ署員の腕の續く限りは、一人だつて君達の手に渡さないぞ』と大聲叱呼して群集を睥睨した。署長の何物も投げ出してかゝつた覺悟の前には、目に餘る烏合の衆も無下に手出しもならず、暫しどよめいて居たが、やがてその中から代表者數名が評議の末『それなら鮮人一同を責任を以て署内に預かつて貰はう、その代り一人でも脱出した時はどうして呉れるか』と署長に詰め寄つた。署長はその大きな拳で胸板を叩き『我輩も男だ、若し一人でも此處から逃走した者があつたら、我輩潔く君等の前で割腹して申し譯をする』、昂然として言ひ放つた。此時の大川署長は、家も忘れ妻子も忘れ、ただ自己の職責に殉する一念あるのみであつた。至誠天に通じては鬼神も爲めに避く、署長の大決心大勇猛心には代表の連中も感動せずには居れなかつた。そこで群集も一應納得して、ぞろぞろ引き上げて行つた。かくて三日の午後六時過ぎに、やつと安心して朝鮮人達を署内に收容することができた。收容人員は朝鮮人二百二十名、支那人七十名、是等の人達に對し、四日の朝署長より是れまでの顚末を説明し、最早充分安心して宜しいと言ひ渡した時は、生きた身そらもなく、互に寄り添うて慄へてゐた一同齊しく起立して感謝したのであつた。

扨て三百名近くの人を署内に收容はしたが、差當つての糧食をどうするかの問題に署長は心を惱ました。鶴見町會の席上で八方から批難の矢を浴びながら署長は例の人道論一點張りで、之を切り拔け、收容鮮支人を一般避難民として遇することの承認を得たので、食糧問題も玆に解決した。そこで、大川署長は一件の始末を具して神奈川縣廳に報告し、當鶴見署は警備力も少ない際であるから、少しも早く收容者を安全の所に移したい、一人でも脱出する者があれば、自分は申譯のため割腹すると町民に約束して居る次第を上申した。縣當局でも

大に心配して其の處置を急ぎ、九日には鶴見署に收容の鮮支人全部——此時は三百一名になつて居た——を潮田の淺野造船所岸壁から汽船華山丸に收容することゝなり、絶對安全の保障ができたので、大川署長は初めて吻と太息をついた。

容貌魁偉元氣潑溂たる署長大川常吉氏は、當時の狀況を追想して、眞に感慨に堪ゑぬ樣子で語つた『自分でも彼の時の行動は意表の外である、今日あれだけの勇氣を顯はすことが果してできるかは自分にも判らない、私は人間一代には何か特功がなくてはならぬと平生考へて居たのであるが、偶々未曾有の震災に遭遇して、素より當然の職責を盡したのみで、特功とは自らも考へないが、容易に得られない經驗を得たことを愉快に思ふ』と。

九、獨力で三十餘名の鮮人を

見事に庇ひ了せた青年銀行員

吉田錦之助といふ二十二歳の青年、東京府下大井町の海苔屋の息子さんで、大井銀行の事務員を勤めて居る。沈着で膽力があり、町の青年團から推されて第七班の理事をして居る。

朝鮮人が二千人とか三千人とか群をなして、横濱の方から沿道を荒らしながら、帝都を指して來襲するといふ噂の高くなつたのが九月二日の事、大井町や品川邊の住民は大恐慌で、上を下へと騒ぎ廻つた。當時鈴ヶ森附近には多數の鮮人が住んで居た。多くは勞働者で、新國道の土工に雇はれ、平素着實で不逞行爲に出でやうといふやうな札付きの者は居なかつた。然るに流言のため土地の人達の反感が嵩じて、通りかゝりの鮮人は素より鈴ヶ森方面に落付いて居た

大正十三年七月二十六日印刷
大正十三年七月二十九日發行

非賣品

著作兼發行者　京城府南山町二丁目十八番地　中島司

印刷者　京城府西小門町三十九番地　羽田茂一

印刷所　京城府西小門町三十九番地　朝鮮印刷株式會社

震災美談奥付